東京新聞
2024年（令和6年）
3月7日
木曜日

「眠る着物」を寄付、シェア

「捨てる」「売る」だけじゃない

使われないまま、たんすに眠っている着物は少なくない。伝統技術がふんだんに使われ、家族の思い出が詰まった一着もあるだけに、扱いに困っている人も多いのでは。そんな中、着物を廃棄するのではなく、途上国に役立つ形で寄付したり、他人とシェアしたりする、新たな活用方法が登場している。

（熊崎未奈）

回収した着物から反物を製造するモンゴルのスタッフら（日本リユースシステム提供）

日本リユースシステム（東京）は昨年12月、家庭で不用になった着物を有料で寄付できるサービス「着物deお針子」を始めた。

利用者は、専用の回収キット（5千円）を購入し、要らなくなった着物や帯、小物を詰めて、同社に送る。キット1袋につき、10式分が入るという。

着物は、国内で無臭化などの加工をした後、モンゴルにある直営工場に送られる。手作業で主に反物に生まれ変わり、北欧や欧米を中心に世界各国へ輸出される。欧米では、日本の伝統衣装である着物の生地は人気で、カーテンやテーブルクロスなどとして再利用されるという。

同社は、このサービスを「自立支援型のお片付け商品」と呼んでいる。モンゴルで作業に当たるのは、貧困層や障害のある人たち。反物の製造を通じて、手に職をつけてもらうことを目指している。国内でも、専用回収キットの製造から発送は、福祉作業所に依頼している。

さらに、キット1袋分の売り上げごとに、ミシン針10本をモンゴルの政府機関を通じて貧困層に寄付し、縫製技術の習得に生かしてもらっている。

同社はこれまでも、古着を回収し、収益の一部などで途上国にワクチンを寄付する「古着deワクチン」など、資源の再利用を通じて、社会貢献につながる事業を展開してきた。営業本部長の辻本真子さん(34)は「思い入れがあり捨てられない着物も、誰かの役に立つと思えば手放す罪悪感も薄くなるはず。捨てる、売る以外の選択肢として取り入れてもらえたら」と話す。